導入展示：創立前史と学部の紹介

導入展示では、京都大学創立前史と10学部について紹介しました。京都大学とゆかりの深い第三高等学校が、その源流の一つとして語られる舎密局が設立された大阪から現在の吉田山の麓に移り、またその土地に京都大学が創立されるまでの経緯を紹介しています。第三高等学校縁の資料としては、折田彦市校長の胸像をはじめ、動物標本や物理実験教育機器などを展示しました。さらに現在の京都大学の10学部それぞれの設立経緯、特徴を紹介するため、京都大学創立125周年記念で発行された冊子『Kyoto University Now by 京都大学基金』から、10学部長・研究科長（取材当時）が語る『学部の歴史』をパネルで展示しました。京都大学総合博物館南館2階の企画展示室までの通路を、1mおよそ10年に見立て、全13mの展示空間に京都大学創立からの125年を再現しました。どの時代にどの学部が設立され、この学部からはしばらく期間が空いていたなど、現在の10学部体制に至る経緯を展示空間を歩きながら体感できるように対応させています。

I1［パネル］

京都大学創立前史

旧制第三高等学校とのつながり

京都大学の歴史を紐解く際に、京大創立より前にこの地に設置されていた旧制第三高等学校（以下、三高）についてもふれておく必要がある。

三高の源流は、明治2（1869）年に設立された舎密局であるが、明治初期の頻繁な制度改編にともない大阪専門学校、大阪中学校など改称を繰り返し、大学昇格を構想して大学分校となるなど約20年間は大阪にあった。第三高等中学校となった明治19（1886）年、かねてより校地狭小の問題を解消するため移転を希望していたが、当時の京都市の熱心な運動もあり現在の京都大学の本部構内（吉田キャンパス）に移転決定。明治22（1889）年に京都に移転した後、明治27（1894）年の学校制度改定により第三高等学校と改称された。

文部省案では三高を昇格させて帝国大学とする案もあったが、京都帝国大学は新設することが決まり、その計画案で「敷地および施設は第三高等学校の土地・建物を充て、三高の移転先は別に考える」とされた。京都帝国大学は三高より校地や施設を譲り受けて明治30（1897）年に創立、三高は東一条通りをはさんだ南側（現在の吉田南キャンパス）に移転し、旧制高校の一つとして存続する。昭和24（1949）年の学制改革に伴い新制京都大学に、教養課程を担当する分校として包括され、廃止された。

なぜ吉田山の麓にあるのか？ －三高新校舎の3つの候補地－

京都移転が決まってからの三高新校舎候補地には、御室仁和寺の東、大徳寺の南、吉田神楽岡の西の3カ所が挙げられたが、仁和寺あたりが有力であったという。しかし、明治19年12月27日に入洛した文部大臣森有礼らが「水質純良なるうへ、東の方の吉田山を除く三方は皆田野にして、遥か西に鴨川をひかえ、北に百万遍知恩寺ありて至極の清地にて、白川村の農夫等及び牛馬の通行するのみ。此地は学業中眼に耳に障害あることなし」と言い残し、水質や学問に打ち込むのに相応しい環境であると判断されたことが伺える。結果、三高新校舎地は、吉田村旧尾州藩邸跡地に正式決定された。

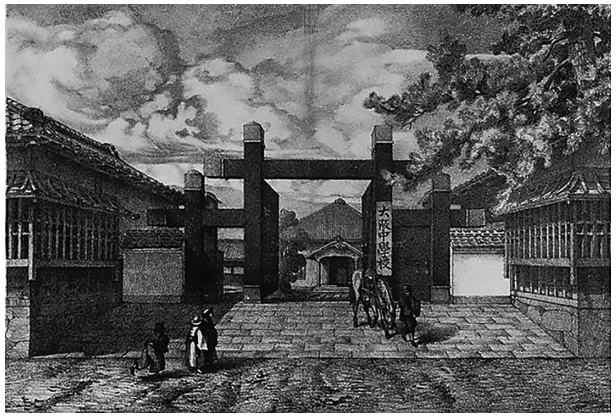
参考：京都大学大学文書館『第三高等学校関係資料解説・目録』2009年、『京都大学百年史：総説編』（第1編第8章）1998年

舎密局から第三高等学校までの学校系統図

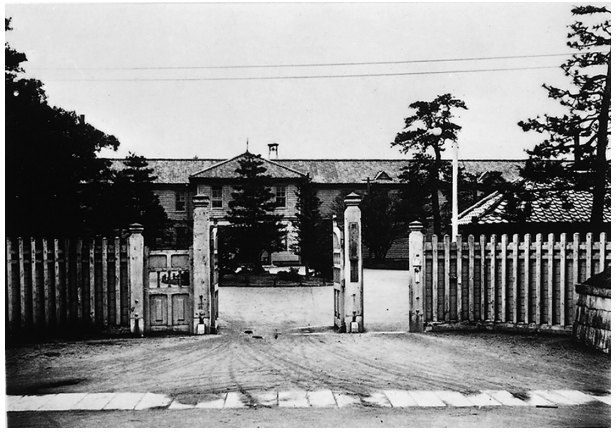
『京大百年』（京都大学百年史編集委員会編）1997年発行,P.9の図を元に作成

折田彦市校長
京都大学大学文書館 提供（023-00010）

舎密局
京都大学大学文書館 提供（M-01505）



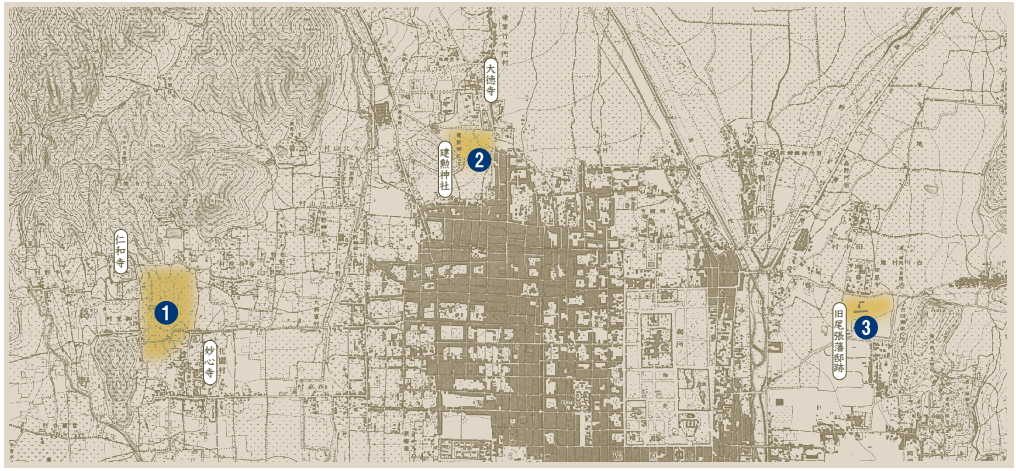
大阪中学校正門
京都大学大学文書館 提供（023-00016）



第三高等学校正門
京都大学大学文書館 提供（I-00901）

なぜ吉田山の麓にあるのか？　ー三高新校舎の3つの候補地ー

京都移転が決まってからの三高新校舎候補地には、御室仁和寺の東、大徳寺の南、吉田神楽岡の西の3カ所が挙げられたが、仁和寺あたりが有力であったという。しかし、明治19年12月27日に入洛した文部大臣森有礼らが「水質純良なるうへ、東の方の吉田山を除く三方は皆田野にして、遥か西に鴨川をひかえ、北に百万遍知恩寺ありて至極の清地にて、白川村の農夫等及び牛馬の通行するのみ。此地は学業中眼に耳に障害あることなし」と言い残し、水質や学問に打ち込むのに相応しい環境であると判断されたことが伺える。結果、三高新校舎地は、吉田村旧尾州藩邸跡地に正式決定された。



1889（明22）測量2万分1仮製地形図（国土地理院）を元に作成

❶葛野郡谷口村のうち、御室仁和寺の東から花園妙心寺の西にかけての地
❷愛宕郡紫竹大門村のうち、大徳寺の南から船岡山建勲神社の北に至る地
❸愛宕郡吉田村のうち、吉田神楽岡の西方、旧尾張藩邸跡

I1　折田彦市旧制第三高等学校校長の胸像

昭和30（1955）年 再制作
京都大学大学文書館 蔵

旧制第三高等学校（以後、三高）初代校長を務めた折田彦市の銅像。三高70周年を記念した昭和15（1940）年に制作されたが、戦時中の金属拠出令により撤収されたため、本像は昭和30（1955）年に再制作された二代目。三高の前身校を含めて30年以上にわたり校長を務め、「前折田校長の人格其物が三高の精神となって表現したのが自由である」と後に評される。教職員と生徒の間で互いに「さん」付けで呼び合う折田の定めた原則は、生徒の人格を尊重する姿勢の象徴とも言われる。多数の卒業生が京都帝国大学に進学したことは、三高と京都帝国大学両校の学風が無縁ではないと言われる所以でもある。

参考文献など
[1] 第1章：創立前史，京都大学百年史編集委員会【写真集】,pp.002-012, 1997
http://hdl.handle.net/2433/152885
[2] 第1章：舎密局から第三高等学校へ，京都大学百年史編集委員会【資料編 2】[第2編：百年の出来事], pp.3-81,2000
http://hdl.handle.net/2433/152916

[1] [2]

I2　ニハトリ骨格

明治23（1890）年 購入
京都大学総合博物館 蔵

京都大学が所蔵する動物標本のなかで最も購入年が古い標本。明治23（1890）年とラベルにあり、第三高等中学校が大阪から京都に移転してすぐの購入とわかる。製作者の坂本福治は、鳥類や魚類の剥製を博物館や大学に多数持ち込んだ明治時代に評判の剥製師。

参考文献など
[1] 坂本福治，み，か，動物学雑誌,vol.13, no.153, pp. 243-244, 1901
http://ci.nii.ac.jp/naid/110003357045
[2] 坂本式動物剥製法，橋本太郎，図鑑の北隆館，1977

[1]

I3　ヘリオスタット

明治22（1889）年 購入
京都大学総合博物館 蔵

太陽の日周運動にあわせて平面鏡を回転させ、反射光を室内に導入する装置。強い人工の光源がない明治期の物理実験室には、太陽光を室内に取り組む仕掛けが欠かせなかった。現在も教育推進・学生支援部棟（旧石油化学教室本館）の壁に残る丸穴跡は、第三高等学校物理学教室時代、教壇であった位置にあたる。

I4　旧制第三高等学校物理学教室の物品管理台帳

記載は明治14（1881）年～昭和20（1945）年
京都大学総合博物館 蔵

第三高等学校物理学教室が購入した実験機器の管理台帳。年月日、物品項目、購入価格などの購買歴が記録されている。最も古い記載は明治14（1881）年で大阪中学校時代のものとみられ、明治、大正、昭和と60年にわたる第三高等学校の歴史ほぼすべてと一致する貴重な機器購入記録。

展示監修者がもう少し言っておきたかったコラム集

展示監修者の塩瀬が見どころや裏話を語ります。

折田彦市先生の自由の範

折田は、木下広次（当時、文部省専門学務局長）らとともに、二番目の帝国大学に関する創立委員に任命されます。当初は、第三高等学校（以下、三高と略す）を帝国大学に昇格させる案もありましたが、結局、新設の京都帝国大学に三高の施設や土地を譲渡することとなります。初代総長には木下広次が就任することとなり、三高は東一条通りをはさんだ南側の二本松地区に移転することとなります。

京都大学の自由の学風を語る上で、三高の学風について語ることが欠かせません。それは、三高の卒業生の多くが京都帝国大学に進学し、また京都帝国大学の卒業生からも三高の教員になる者もいるなど、人事交流が多かったことに由来します。折田退任後に『嶽水会雑誌』に掲載された記事には、「前折田校長の人格其物が三高の精神となって表現したのが自由である」と記されるほど、折田の思想と三高の学風は切っても切り離せない関係にあったようです。そもそも折田の中にある自由のイメージはどのように形成されたのか。これは、折田自身が留学していた先のニュージャージー大学（現・プリンストン大学）で経験した学風にあると言われており、学生の自主性と学習意欲を重んじた「秩序ある自由」の学風を範としたのではないかと言われています。

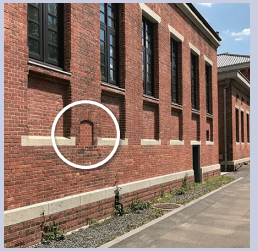
職人技の動物剥製

ニハトリ骨格標本は、京都大学にある動物標本のなかで一番古い明治23（1890）年購入の資料です。京都大学の創立以前の購入になりますから、第三高等中学校が大阪から京都に移転してすぐのころにあたります。製作者の坂本福治は、鳥類や魚類の剥製を当時、博物館や大学に多数持ち込んでいた明治の剥製師として著名。息子の坂本喜一は国立科学博物館所蔵の忠犬ハチ公の剥製をはじめ、多数の剥製を世に残し、坂本式剥製法も著しています。

ニハトリ骨格

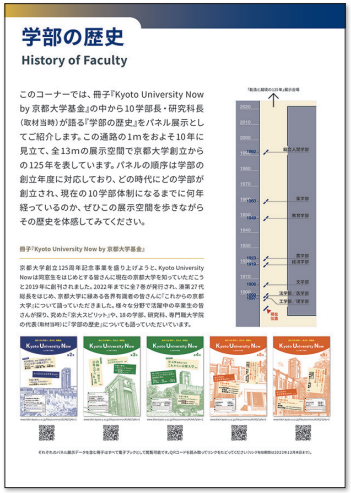
壁に空いた穴

時計台のある京都大学吉田キャンパス本部構内、正門入ってすぐ左手にレストラン「カンフォーラ」があります。さらにその北西にある赤煉瓦造の建物は京都大学に現存する最古の建築物の一つで、旧第三高等学校物理実験室です。この建物の南西の壁に丸穴の痕跡が残されています。この穴を通した建物の中は、階段教室のちょうど教壇位置にあたります。この穴には、ヘリオスタットと呼ばれる太陽の日周運動にあわせて平面鏡を回転させ、反射光を室内に導入する装置が設置されていた穴と推測されています。明治期の物理実験室には当然ながら強い人工の光源がありませんでした。そこで、太陽光を室内に取り込む仕掛けが欠かせません。今でいえば電源コンセントや情報源LANコネクタの位置を図面上で気にしますが、100年以上前の物理教室ではそれが「光源」の位置だったのです。歴史的な物理実験の痕跡が今に残る、そんな箇所を探しながらキャンパスを探訪していただくのも大学散策の楽しみ方の一つかもしれません。



壁に残る穴の跡

I6［パネル］



学部の歴史

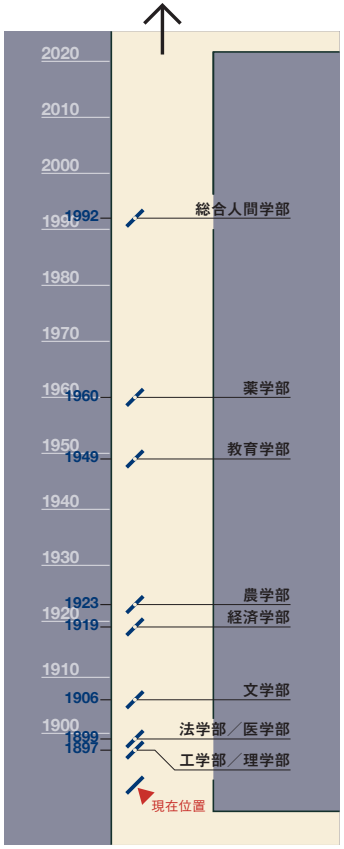
History of Faculty

このコーナーでは、冊子『Kyoto University Now by 京都大学基金』の中から10学部長・研究科長（取材当時）が語る『学部の歴史』をパネル展示としてご紹介します。この通路の1mをおよそ10年に見立て、全13mの展示空間で京都大学創立からの125年を表しています。パネルの順序は学部の設立年度に対応しており、どの時代にどの学部が設立され、現在の10学部体制になるまでに何年経っているのか、ぜひこの展示空間を歩きながらその歴史を体感してみてください。

冊子『Kyoto University Now by 京都大学基金』

京都大学創立125周年記念事業を盛り上げようと、Kyoto University Nowは同窓生をはじめとする皆さんに現在の京都大学を知っていただこうと2019年に創刊されました。2022年までに全7巻が発行され、湊第27代総長をはじめ、京都大学に縁ある各界有識者の皆さんに『これからの京都大学』について語っていただきました。様々な分野で活躍中の卒業生の皆さんが探り、究めた『京大スピリット』や、18の学部、研究科、専門職大学院の代表（取材当時）に『学部の歴史』についても語っていただいています。

「創造と越境の125年」展示会場



工学という学問について

「工学部は単にものづくりのための応用研究をするところではない」。工学という学問が何を目指し、京大工学部は何を大切にしているのか、大嶋工学部長（取材当時）に伺いました。

大嶋 正裕（おおしま まさひろ）
1981年京都大学工学部化学工学科卒業。1986年京都大学大学院博士後期課程修了（化学工学専攻）。1987年工学博士。1994年宮崎大学助教授。1996年京都大学助教授。2001年より現在、京都大学教授。2018年より2021年3月末まで工学研究科長および工学部長。

――工学部の歴史の中で、特筆すべきこと、エポックメーキングと考える出来事はありますか。

工学部100年以上の歴史の中で、過ごした時期によって人それぞれ考えは違うと思いますが、私自身が京都大学で過ごしたわずか30年という期間で申しますと、2つ挙げられると思います。1つは福井謙一先生のノーベル化学賞受賞、もう1つは工学研究科の桂キャンパスへの移転です。

桂キャンパスへの移転が始まって16年が経ちました。交通の不便さ、福利厚生施設の不足、移転の未完了などから生じるさまざまな困難はありますが、1キャンパス1研究科の運営のためコンセンサスが得られやすいというメリットがあります。工学研究科独自の学生相談室（保健室）を開設する際も、「学生の役に立つなら」と先生たちはすぐに賛成してくれました。今年度中に桂図書館が開館されるので、研究支援サービスなども充実していくでしょう。また、水や電気、ガスの使用量を総合管理できる機能もあって、節電キャンペーンを実施したところ大きな効果がありました。今後は、桂キャンパスをSDGs達成率ナンバーワンキャンパスにすべく、さまざまなトライをしていきたいですね。

――福井先生のノーベル賞受賞を選ばれた理由は何でしょうか。

福井謙一先生がアジア人として初めてノーベル化学賞を受賞されたのは1981年、私が大学院生の頃でした。工学部からノーベル賞受賞者が生まれたことがうれしいだけでなく、福井先生が恩師の喜多源逸先生から言われた「応用をやるには、基礎をやれ」という言葉が、あらためて教員や学生たちに深く刻まれたことは、意味の大きい出来事だったと思います。

工学部はものづくりのための応用研究をするところだと思われがちですが、本学の工学部は、数学、物理、化学、生物、地学の科学を基盤として、新たな原理や原則の発見、基本概念の構築を目指し、基礎研究から応用研究まで幅広く展開しています。「基礎や原理をしっかり学んでおくことが、将来幅広い応用展開や技術の発展を可能とする」という信念をもって、基礎や真理の探究を重視する教育を行っています。「京都大学創立時、理科と工科をまとめた理工科大学が設置されたのは、基礎と応用を一体化させたいという狙いがあったとされています。その中で、双方の研究者がどちらのこともよく理解しようとする伝統が培われてきました。こうした経緯から生まれた工学部の「基礎や原理を重視する」理念が、福井先生のノーベル賞受賞により明確になり、その後の野依良治先生のノーベル賞受賞へとつながっていった。まさにエポックメーキングな出来事と言えると思います。（Kyoto University Now by 京都大学基金 第2号 P.17へつづく）

工学部の沿革

工学部の歴史は、1897（明治30）年6月、京都帝国大学が創設され、分科大学の一つとして同年9月に理工科大学が開校したことに始まります。最初に置かれたのは土木工学科と機械工学科でした。

1914（大正3）年7月、理工科大学は理科大学と工科大学に分離されました。

1919（大正8）年2月、分科大学の制度が学部制に改められ、工科大学が工学部となりました。

工学部は創設以来、本学の歴史とともに歩み、それぞれの時代の学問的・社会的要請に応えるように拡充整備され、今日では工学の分野のほとんどを網羅した本学最大の学部に発展しています。

1993（平成5）年から1996（平成8）年までの4年計画で大学院重点化が実施され、それに伴う工学部の改組により、同期間内に工業化学科、物理工学科、電気電子工学科と情報学科、地球工学科と建築学科が誕生しました。

大学院工学研究科は1953（昭和28）年に設置されましたが、前述の大学院重点化を契機に、工学部各学科所属の157講座（小講座）は工学研究科の25専攻に再編され、附置研究所や研究センター等の協力講座を加えて、新時代に相応しい大学院の教育研究を実施するようになりました。

さらに、大学院重点化は既存の研究科の改組と新しい研究科の創設を促した結果、工学研究科を構成していた専攻のいくつかもそれらの創設に参画して移行し、また専攻の再編統合も進み、2005（平成17）年以降の工学研究科は17専攻で運営されています。

理学部が大切にしていること

「理学がもっとも大切にしていることは何か？」。理学という学問と、京大理学部の学びにおける特徴について、平島理学研究科長（取材当時）に伺いました。

平島 崇男（ひらじま たかお）
1978年京都大学理学部卒業。1985年京都大学理学研究科地質学鉱物学専攻博士後期課程修了。1985年理学博士。1985年京都大学理学部助手、1995年同助教授、2002年より現在、同教授。2019年より2021年9月末まで理学研究科長および理学部長。

――理学部の歴史の中で、特筆すべき出来事はありますか。

理学部の歴史を語るうえで欠かせないのは、卒業生の中から、日本人初の受賞者である湯川秀樹博士を筆頭に4名のノーベル賞受賞者、2名のフィールズ賞受賞者など、国際的舞台で活躍する優れた人材を数多く輩出してきたことです。卒業生ではありませんが、京都大学理学部で教鞭をとっていた先生の中にもノーベル賞受賞者がいます。私自身は、その一人である益川敏英先生（2008年物理学賞受賞）が現役の頃を知っていて、お世話になったことがあります。ノーベル賞受賞者を目の前にすることは大きな感動で、話に聞くだけとはまったくの別物。益川先生の科学に向き合う厳しい姿勢には、背筋が伸びる思いがしました。

そうした先生が身近にいたことで、理学部の先生も学生も刺激を受けて互いに切磋琢磨してきた。優れた先達や研究成果は、各地の多様な個性を有する学生たちが本学理学部を目指す志望動機にもなっています。結果として、多才な人が集い、独創的な研究を生み出すことにつながってきたのだと思います。

――理学部最大の特徴である「理学科1学科制」は、どういった理念に基づいているのでしょうか。

「理学科1学科制」は学生に大きな選択自由度を与えるシステムで、1～2回生は狭い専門分野に閉じず幅広い学問を学習させ、3～4回生では自らの興味や意欲、能力、適性に応じて1つの専門を選ばせ（系登録）、理学的素養を深化させます。視野の広い教育を受ける中で、自律的学修姿勢を身につけて自らの“やりたいこと”を見つけ、基礎学力を確かなものとしたうえで、専門的知識や技能を身につけてほしい、というのが狙いです。要は、「京都大学が創立以来築いてきた自由の学風のもとで、自分の好きなことを見つけてとことん学ぶように」というわけです。

こうした理念には、理学という学問の特徴が関係しています。理学というのは、自然現象を支配する原理や法則を探求する学問であり、分野は多岐にわたります。世界のあり様を大きく変えるような科学上の発見の多くは、自然現象の理に対する純粋な好奇心に基づく理学が生み出してきたと言っても過言ではありません。基礎的・萌芽的研究を重視するとともに境界・複合領域の研究分野に創成させること、あるいはバイオサイエンス、ナノテクノロジー、環境、エネルギー問題など現代社会が直面する課題に基礎科学の観点からアプローチすることなども、理学が目指すところです。

そこで、理学部教育においてもっとも大切にしているのが、「自然科学の基礎体系を広く深く理解し、その個々の知識を総合化して、自ら考え創造的に展開できる能力」を養うことです。基礎をベースに自らが学びをデザインして新しい理学を創造していく、その能力を養う方法としての1学科制なのです。（Kyoto University Now by 京都大学基金 第3号 P.15へつづく）

理学部の沿革

理学部の歴史は、1897（明治30）年に京都帝国大学が創設され、理工科大学が開校したことに始まります。翌年に数学科、物理学科、純正化学科（化学科）が設置され、1914（大正3）年に理工科大学は理科大学と工科大学とに分離、1919（大正8）年に理科大学が理学部となりました。

1921（大正10）年に宇宙物理学科、地球物理学科、動物学科、植物学科、1922（大正11）年に地質学鉱物学科が設置され、100年前の時点で、現在の理学部の根幹をなす専攻分野が整備されたことになります。その後、各地に天文台、地震や火山の観測所、実験所などが設置されています。

1994（平成6）年には9つあった学科を廃止し、理学部最大の特徴である理学科1学科制に改組されました。あわせて研究科も改組され、現在は数学・数理解析、物理学・宇宙物理学、地球惑星科学、化学、生物科学の5専攻で運営されており、1学科制のもとで「緩やかな専門化」を経て、それぞれの学生の能力・適性に合致した専門分野に向かう教育を行っています。

年表

1897（明治30）	京都帝国大学創立／理工科大学開設
1898（明治31）	数学科、物理学科、純正化学科（化学科）設置
1914（大正3）	理工科大学を理科大学と工学大学に分離
1921（大正10）	宇宙物理学科、地球物理学科、動物学科、植物学科設置
1922（大正11）	地質学鉱物学科設置
1953（昭和28）	大学院理学研究科設置
1971（昭和46）	生物物理学科設置
1994（平成6）	9学科を廃止し、理学科1学科に改組
1995（平成7）	研究科を5専攻に改組

法学を学ぶことの意味

「法学部では何を、何のために学ぶのか？」。法学という学問が何を目指し、京大法学部は何を大切にしているのか、山本法学研究科長（取材当時）に伺いました。

山本 敬三（やまもと けいぞう）
1983年京都大学法学部卒業。1983年京都大学法学部助手、1986年同助教授。1997年より現在、同教授。2000年法学博士。2015年法曹養成専攻長（法科大学院長）。2019年より2021年3月末まで法学研究科長および法学部長。

――法学部の歴史の中で、エポックメーキングと考える出来事はありますか。

エポックメーキングというよりは、法学部のアイデンティティを形成した出来事として、2つを挙げたいと思います。

1つは、法学部創設時の理念として、「あるべき大学の姿の実現」を目指したことです。大学とは官吏養成のための知識を伝授する場ではなく、研究を通じた教育を行い、「自ら探究する能力を養う」場である。そうした理念のもと、自由な科目選択を認め、各教授が演習を開設し、論文作成が卒業要件とされました。東京帝大法科に対する「挑戦」とも言えるものです。残念ながら、この教育方法では国家試験に多くの合格者を出すことは難しく、使命を十分に果たせずにわずか8年ほどで方針転換を余儀なくされました。

しかし、挑戦は挫折したとはいえ、自分の力で探究する能力を養うことを大切にするスピリットは、今の法学部に受け継がれています。

もう1つは、1933（昭和8）年に起こった瀧川事件です。瀧川幸辰教授の刑法学説がマルクス主義的とされ、政府が瀧川教授の休職処分を強行し、それに抗議して法学部の教官39名が辞表を提出しました。事件はその後、政府の分断策によって辞職組、残留組、復帰組に分かれ、深い爪痕を残すことになりました。

瀧川事件は、学問の自由と大学の自治を確立するためには、大きな犠牲を払わなければならなかったことを物語っています。当事者である法学部は、学問の自由と大学の自治を何より大切にし、忘れられないようにする責務があると考えています。

――外部からの圧力に抗して犠牲を払いながら学問の自由を守り抜いてきた中で、法学部・法学研究科はどのような特徴を育んできたのでしょうか。

「法」とは、人々が共同生活を営むために築き上げてきたルールであり、国家・社会・経済で生じるさまざまな問題に対処するための政策を実現する手段でもあります。そのような法の成り立ちや仕組み、意味や目的、可能性や限界を学び、「公正な社会を実現し、政策の形成と遂行を担う」人材を育てることが、大学における法学教育の意味です。狭い意味での法律家だけでなく、国家・社会・経済の担い手を養成するという重要な使命を持っています。

この使命を前提に、本学法学部が大切にしてきたのが「自学自習」の精神です。これは京都大学全体を貫く理念ですが、我々が目指すのは、「自分がわからない問題に直面しても、自分で調べて考え、わかるようになる」、「自分ができない課題に直面しても、自分で考えて工夫し、課題を克服できるようになる」ことです。まさに、社会で生きていく力そのものと言えるでしょう。自分でできるようになるには、手取り足取り教えてはならない。（Kyoto University Now by 京都大学基金 第3号 P.17へつづく）

法学部の沿革

法学部の歩みは、京都帝国大学創設の2年後の1899（明治32）年に開校した法科大学に始まります。わが国第二の帝大法科として、「独立自修」の気風を養い、独自の科目編成・演習・試験制度の導入などが行われました。

1919（大正8）年の学制改革により法学部と改称、経済学部との分離もなされ、1949（昭和24）年の新制大学京都大学発足後は、多角的な門戸開放を推進しました。

1992（平成4）年の大学院重点化により、学部と大学院教育の役割が明確化されました。さらに、国立大学が法人化された2004（平成16）年、法学研究科は抜本的な組織再編を行い、法政理論専攻・国際公共政策専攻・法曹養成専攻（法科大学院）の三専攻体制となりました。国際公共政策専攻は2006（平成18）年に発展的に解消して、公共政策大学院が設けられました。現在、高度専門職業人としての法曹養成のための教育は法曹養成専攻が中心となり、法学部は社会の多様な分野で重要な役割を担う人材を育成するための教育に重点を置いています。

年表

1899（明治32）	法科大学開設
1919（大正8）	法学部に改称
1933（昭和8）	瀧川事件
1953（昭和28）	大学院法学研究科設置
1979（昭和54）	国際法政文献資料センター設置
1998（平成10）	法政実務交流センター設置
2004（平成16）	法科大学院設置
2006（平成18）	公共政策大学院設置
2020（令和2）	法曹基礎プログラムの導入

医学に求められること

「人々の福祉に貢献する」。第一義にして最大の使命を果たすため、医学部はどんな取り組みをしてきたのか、岩井医学研究科長（取材当時）に伺いました。

岩井 一宏（いわい かずひろ）
1985年京都大学医学部卒業。1991年京都大学医学研究科博士課程内科系専攻研究指導認定退学。
1997年京都大学医学研究科助教授、1999年京都大学生命科学研究科助教授、2001年大阪市立大学医学研究科教授、2008年大阪大学生命機能研究科／医学系研究科教授、2012年京都大学医学研究科教授。2018年より2022年9月末まで医学研究科長および医学部長。

――医学部の歴史の中でエポックメーキングと考える出来事はありますか。

2018年に本庶佑先生がノーベル生理学・医学賞を受賞されたことかと思います。これまで、医学部・医学研究科は数々の偉大な研究成果を世界に発信してきましたが、ノーベル賞受賞には至りませんでしたので、本当に大きな喜びでした。

何よりも基礎的な研究を着実に推進した成果が新しいがんの治療法と臨床に結びついた点を評価されたことに意味があります。医学は基礎医学などの学理の追求を通して、疾患と対峙し克服に貢献するという使命がありますから。

見つけた源流をいかに育み人類に役立つようにするか。医学だけではなく自然科学の研究者にとって大切なことを実現して評価された、という点で大きなエポックだと考えています。

――医学部・医学研究科にはどんな特徴がありますか。

医学研究を大切にすることが第一ですが、いち早く産学連携を進めてきたことも、一つの大きな特徴です。1990年代にはすでに寄付講座を開設し、比較的大型で基礎研究段階から企業が加わり創薬や治療に結びつけるための共同研究を積極的に実施してきました。

京都大学「医学領域」産学連携推進機構（KUMBL）を設置し、メディカルイノベーションセンター、イノベーションハブ京都というオープンイノベーション施設を設置したのも、他大学に先駆けた試みでした。

基礎研究の治療応用を目指すには、大学だけでできることには限りがあります。KUMBLの設置は初期段階から企業と共同研究すべきだという考えに基づく取り組みですが、医学部・医学研究科には、本庶先生の恩師である早石修名誉教授など企業との共同研究を推進してこられた例が身近にありました。

研究成果を広く社会に還元して多くの疾病の治療につなげ、人類の健康と福祉に貢献する。医学部・医学研究科が第一義にして最大の使命の実現を念願してきた結果だと思います。

――現在、医学部2学科、医学研究科5専攻となっている体制についてのお考えをお聞かせください。

医学・医療を取り巻く環境は大きく変貌しています。科学技術の進展に伴い、医学は学際的な分野を形成して集学的研究が拡大し、手術をはじめ看護や検査の技術も高度化、ビッグデータの解析技法は急速に進歩しています。専門分野ごとの教育・研究だけで先進的な医学・医療に貢献できる人材を育てるのは困難になっているのも事実です。そこでここ十数年、特に医学研究科においてさまざまな改革を行ってきました。

2000年には医科学専攻と社会健康医学系専攻を設置しました。前者は医学以外の学部教育を受けた学生を対象とし、後者は日本で初めて開設された大型の社会医学の専門職大学院です。

（Kyoto University Now by 京都大学基金 第4号 P.15へつづく）

医学部の沿革

医学部の歴史は、京都帝国大学創設2年後の1899（明治32）年に開校した医科大学に始まります。最初に医学科が置かれ、同年に附属医院を開設しています。

時代に応じて講座を設置し組織やカリキュラム改革を行いながら、現在、医学部は医学科と人間健康科学科、医学研究科は医学専攻、医科学専攻、社会健康医学系専攻、人間健康科学系専攻、京都大学・マギル大学ゲノム医学国際連携専攻の5専攻からなる全国屈指の規模を誇る研究科となっています。

日本初の社会健康医学系専攻、医学科卒業生以外が医学を研究する博士後期課程を有するわが国唯一の医学科専攻の設置など、つねに時代に先駆けた取り組みをしてきました。また、他大学よりいち早く寄付講座を開設しています。

疾患の克服に誠心誠意尽力し、それらに資する人材を育成すること、医学・医療領域に関わる知を創造し実社会へ還元すること。その最大の使命に向けた教育・研究に努めています。

年表

1899（明治32）	医科大学開設、医科大学附属医院開設
1955（昭和30）	大学院医学研究科設置
1975（昭和50）	京都大学医療技術短期大学部設置
2000（平成12）	医学研究科に社会健康医学系専攻医科学専攻設置
2003（平成15）	医学部に保健学科を設置
2007（平成19）	医療技術短期大学部廃止、医学研究科に人間健康科学系専攻設置
2008（平成20）	保健学科を人間健康学科に改称
2018（平成30）	京都大学・マギル大学ゲノム医学国際連携専攻を設置

文学が果たすべき役割

「人文学が果たすべき役割とは何か?」。絶えず変化する社会の中で人文学にはどんな役割が求められ、京大文学部はどう応えようとしているのか、宇佐美文学研究科長(取材当時)に伺いました。

宇佐美 文理（うさみ ぶんり）
1982年京都大学文学部卒業。1989年京都大学文学研究科博士後期課程研究指導認定。信州大学教養部講師、人文学部助教授を経て2001年京都大学人文科学研究所助教授、2003年京都大学文学研究科助教授、2007年准教授、2012年文学博士、教授。2020年より2022年3月末まで文学研究科長および文学部長。

文学部の沿革

文学部は、京都帝国大学創設9年後の1906(明治39)年に設置された文科大学を前身としています。京都帝大創設案の中に文科大学設置の構想がすでにあり、教授就任予定者が海外留学を行うなど、長い準備期間を経て開校に至りました。

当初は哲学科、史学科、文学科の3学科編成をとり、創立から4年の間に24講座が集中的に設置されています。心理学を独立講座とし、中国哲学・東洋史学・中国文学を分離、史学科の中に地理学講座を設けるなど、東京帝大とは異なる特色が生まれました。

現在は文献文化学、思想文化学、歴史文化学、行動文化学、現代文化学、国際連携文化越境の6つの専攻と、それに属する30を超える研究分野(専修)から成り立っています。2017(平成29)年に開設した国際連携文化越境専攻は、ドイツ・ハイデルベルク大学との連携による、人文・社会科学系学部では初めてとなる「ジョイント・ディグリー制度」を採用し、人文学的伝統を継承しつつ、新たな時代を切り開く人材の育成に努めています。

年表

1906(明治39)	文科大学開設、哲学科設置
1907(明治40)	史学科設置
1908(明治41)	文学科設置
1914(大正3)	文学部陳列館竣工
1953(昭和28)	大学院文学研究科設置
1992(平成4)	第四学科として文化行動学科設置
1995(平成7)	大講座化を実施。4学科44講座を1学科16大講座へ改組。4専修を設置
1996(平成8)	大学院重点化。5専攻16大講座に改組
2016(平成28)	学域・学系制度開始。5専攻6大講座に改組
2019(平成31)	文化遺産学・人文知連携センター設置

――文学部の歴史を語るうえで欠かせないトピックからお聞かせいただけますか。

文学部の大きな特徴である「自由で内発的な学風」の確立に大きな影響を与えた事柄として、次の2点が挙げられると思います。まず、草創期において、ドイツ式の研究中心主義を導入したこと、そして学歴や職歴に関係なく人材を登用したことです。

研究中心主義とは「研究を通じた教育」のことで、現在の大学では当たり前になっている教育システムです。講義だけでなくゼミナールをカリキュラムに組み込んで学生に研究させ、学生は研究室に出入りして自由に文献を読むことが許されました。学生を自立した研究者と見なすことで、学生たちは内発的に学ぶ意欲を育んでいきました。

人材登用については、文壇より幸田露伴、新聞界より内藤湖南、帝国大学選科修了の学歴しかない西田幾多郎などを採用し、当時の大学の常識にとらわれない人事を行いました。それらの人材が人文学研究を牽引し、やがて「京都学派」と呼ばれる潮流を生み出していきます。

京都学派には哲学と中国学があり、西田幾多郎を中心とする哲学は世界的にも著名であり、続く田辺元らに継承され「日本哲学」とも呼べる哲学の学統を形成しました。一方の中国学は、内藤湖南、狩野直喜らを中心とし、その後の世界の中国学をリードする存在として、中国本国においてもその業績は高く評価されています。

こうした創設時の施策が文学部の「自由で内発的な学風」を育て、優れた研究成果を送り出してきたと言えると思います。

――「自由」や「自学自習」は京都大学全体を貫く理念ですが、どういった点が文学部の特徴でしょうか。

私個人の印象かもしれませんが、京大の「自学自習」という理念をもっとも体現しているのが文学部だと考えています。ただ、自学自習とは単に「好き勝手にやっていい」ということではなく、あくまで学生が"主体的に"取り組むという前提に成り立つものです。

学生の主体的な学びはすべての大学において必要なことですが、京大文学部においては特に、教員ひいては学部全体が、学生の主体的に学ぼうという姿勢に対して強い信頼を寄せている点が魅力だと私は思っています。それは、昨日今日の話ではなく、100年を超える歴史を通じて培われてきたものであり、教員が学生を信頼していると同時に、実際にその信頼に応え得る学生が集まってきているのです。「ここはそういう場所なんだ」と、あえて言葉にして語られることはありませんが、目に見えないその共通の理解こそが、京大文学部の雰囲気をつくり、京大文学部の魅力を支えています。

こうした雰囲気の中でなされる研究が「自由で内発的な学風」をつくり上げています。(Kyoto University Now by 京都大学基金 第4号 P.17へつづく)

経済学部が描く未来像

「21世紀に必要な新しい経済学とは？」。世界の統治機構が構造変化を迎えつつある現在において、経済学はどんな方向へ進もうとしているのか、依田経済学研究科長に伺いました。

依田 高典（いだ たかのり）
1989年京都大学経済学部卒業。1995年京都大学経済学研究科博士後期課程単位取得退学。1997年京都大学博士（経済学）。日本学術振興会特別研究員、甲南大学助教授を経て、2000年京都大学経済学研究科助教授、2007年教授。2021年より現在、経済学研究科長および経済学部長。

経済学部の沿革

経済学部は1900（明治33）年に法学部（法科大学）内で始められた経済学関連の講義を前身とし、1919（大正8）年に分離して誕生しました。日本における経済学の研究と教育に関しては、最も古い伝統を持つ学部です。100年の歴史の間に、著名な研究者や実業界のリーダーを送り出してきました。経済システムの高度化、市場の進化、経済のグローバル化を受けて、絶えず先進的な経済学と経営学の研究を進めています。

大学院経済学研究科では、2018（平成30）年に博士後期課程に国際ダブルディグリー・プログラムを設置、2019（平成31）年に修士課程の組織改編を行い、研究者養成プログラムと高度専門人材養成プログラムを開設するなど、時代に即した改編を行いながら、高度専門職業人の養成に努めています。

年表

1900（明治33）	法科大学に経済学第一講座財政学を設置
1919（大正8）	法学部から分かれて経済学部を開設
1953（昭和28）	大学院経済学研究科設置
1962（昭和37）	経済研究所設置
2006（平成18）	経営管理大学院と公共政策大学院を設置
2018（平成30）	大学院博士後期課程に国際ダブルディグリー・プログラムを設置

――経済学部・経済学研究科の特徴としてどんな点が挙げられますか。

経済学部は1919年に法学部から分離独立して設立されましたが、同年に東京大学でも経済学部が発足しており、同時期に日本の大学として最古となる経済学部が誕生しています。以来100余年にわたる歴史の中では、第二次世界大戦を含め長い苦難の時期がありました。マルクス経済学の研究者であった河上肇先生の投獄なども苦しい歴史の一例でありましょう。1970年前後の学生運動の時代には、経済学部は大きな闘争の舞台となりました。いくつかの大きな社会事件を引き起こしており、再建には20年近い時間がかかりました。

そんな中でも、経済学部は著名な研究者を多く送り出しています。近代経済学においては、河上先生と同時期に活躍された高田保馬先生がおり、門下からは多くの俊英が生まれています。ノーベル経済学賞の候補として何度も名前が挙がった森嶋通夫先生もその一人です。1990年以降、金融工学や行動経済学、医療経済学、環境経済学など現代社会に必要とされる新しい学問分野においても著名な研究者を生むに至っています。

――現在の経済学部・経済学研究科で課題と考えていることはありますか。

いくつか課題があり、真っ先に挙げられるのが女子学生比率と大学院進学率、国際競争力の低さです。

文系学部は女子学生の比率が高く、他学部では30～50％程度あるのに対して、経済学部は20％を超えることができない状況が続いています。女性教員にいたっては10％強にとどまっています。文系学部と位置づけられながら、「数理的な学問」というイメージが根強く、女子学生の敬遠を招いていることが一因です。

大学院進学率は文学部や法学部で30％前後あるにも関わらず、10％程度に過ぎません。経済学部を志望するほとんどの学生が就職志向で、実際に企業からのニーズが高いといった理由があります。就職活動が終わったとたんにモチベーションを失い、4回生になって経済学のおもしろさを理解することなく卒業していく学生が少なくないことも課題となっています。

――経済学における国際競争力の課題とは？

日本の国際競争力の低下は今に始まったことではなく、まして京都大学だけの問題ではありません。そもそも日本の経済学は英米からの輸入学問であり、国際競争力を意識してこなかった側面が否めません。

国際競争力の鍵となるのは論文の数と質であり、質を左右するのがオリジナリティやイノベーションです。難しいのは、真理を探究するサイエンスとは違い、経済学は科学であり文化でもあるため国力と切り離せません。（Kyoto University Now by 京都大学基金 第5号 P.13 へつづく）

農学が向かうべき道

「農学が解決すべき問題とは?」。生命・食料・環境に関わる地球規模の課題に対して、農学はどのように立ち向かおうとしているのか、澤山農学研究科長に伺いました。

澤山 茂樹（さわやま しげき）
1986年京都大学農学部卒業。1991年京都大学農学研究科博士課程修了。農学博士。1991年より通商産業省工業技術院資源環境技術総合研究所（2001年独立行政法人産業技術総合研究所に改組）、2005～2010年産総研バイオマス研究センター。その間にロンドン大学キングスカレッジ客員研究員など。2009年京都大学大学院農学研究科教授。2020年より現在、農学研究科長および農学部長。

農学部の沿革

農学部は 1923（大正12）年、農作園芸学科（後に農学科と改称）・林学科・農芸化学科・農林生物学科・農林工学科・農林経済学科という研究方法によって区分された6学科で出発しています。この体制は純粋科学的な農学の発展を展望したもので、その後、水産学科、林産工学科、食品工学科、畜産学科が設置され、1970年代前半には総合的に農学を展開する体制が整えられました。

農学研究科は1953（昭和28）年に発足、1981（昭和56）年に学部10学科、研究科11専攻となり、基礎と応用を網羅した教育研究体制が整備されました。「生命・食料・環境」をキーワードとして、人と自然の豊かな共存の道を開くことを目指しています。

2001（平成13）年に附置研究所であった食糧科学研究所との統合による研究科の強化と学部の再改組を行い、6学科7専攻体制を取るに至りました。

農学の総合研究拠点として先端的・統合的研究を展開し、21世紀の社会が求める柔軟で総合的な思考力と専門性を兼ね備えた人材育成に努めています。

年表

1923（大正12）	農学部設置
1924（大正13）	農林園芸学、林学、農林化学、農林生物学、農林工学、農林経済学の6学科設置／附属農場、附属演習林設置
1953（昭和28）	農学研究科設置
1972（昭和47）	附属水産実験所設置（舞鶴市）
1974（昭和49）	附属牧場設置（旧高原畜産試験牧場）
1998（平成10）	附属農場・附属演習林・附属亜熱帯植物実験所・附属牧場・附属水産実験所は大学院研究科の附属施設に再編
2001（平成13）	農学部3学科を6学科に改組
2003（平成15）	農学研究科附属施設の演習林、亜熱帯植物実験所、水産実験所が全学共同利用として設置のフィールド科学教育研究センターへ移行
2016（平成28）	附属農場が大阪府高槻市より京都府木津川市へ移転

――農学部の歴史を語るうえで欠かせないトピックをお聞かせください。

1923年に京都帝国大学の7番目の学部として農学部が設置され、農作園芸学科（後に農学科と改称）・林学科・農芸化学科・農林生物学科・農林工学科・農林経済学科の6学科より出発した、そのこと自体が大きなトピックだと思います。研究方法によって学科を区分していますが、農林工学科と農林経済学科という理系学科と文系学科をそろえ、当時には概念すらなかった文理融合の形でスタートしています。農学に関わる事柄は経済的な側面も大きく、総合的な学問だと捉えていたのでしょう。その後、水産学、林産工学、食品工学、畜産学など農学全般にわたる学科が設置されますが、当初から文理融合を実現して純粋科学的・総合的な農学の展開を目指すという京都大学農学部の特徴を形づくったという点で、大きなトピックだと言えます。

――純粋科学的・総合的な農学の発展を展望する中で、農学部はどんなことを目指してきたのでしょうか。

農学部にとって重要なテーマの一つが、食料問題です。私自身、1980年代に入って「食料危機は起きるか」が議論され始めたことが農学部に入学するきっかけとなりました。

世界人口が最多に達するのは2100年頃とされてきましたが、最近の学説では2064年とも言われています。農耕地が増えない中で人口増加や地球環境の劣化が進み、食肉需要と飼料用穀物需要の拡大に伴い食用穀物の供給が減少する。気候変動によって農業生産の不安定性も高まってくる。地球の安定した食料生産を考えるために、農学が取り組むべきことは山積みです。

解決を迫られている問題は食料だけではありません。地球上の全森林面積はこの数十年間、減少を続けており、地球全体の環境に深刻な影響を及ぼしています。

農学部が掲げるキーワード「生命・食料・環境」は、まさに21世紀の重要課題です。世代を超えた生命の持続、安全な食料の確保、環境劣化の抑制と劣化した環境の修復など、人類が直面する課題に取り組み、その解決に貢献できる人材を育成すること。我々が担う役割は重大で、緊急性の高いものばかりです。

――農学部の歴史を語るうえで欠かせないトピックをお聞かせください。

特徴を端的に表す言葉が「フィールドワークの徹底」と「グローバル展開の推進」です。

動植物や自然を対象とする農学の教育・研究においては、広い視野で現場を見て、そこで起こっている問題や問題のありかを探すことが求められます。フィールドは農場や牧場などの附属施設はもちろんのこと世界中に及びます。農業や畜産、水産、林産などは、環境や文化、技術など国によって事情がさまざまですから。（Kyoto University Now by 京都大学基金 第5号 P.15へつづく）

教育学部が探究するもの

「教員養成に特化しない教育学部の役割とは？」。人間の発達、そして一生に関わる教育に対して、教育学部はどのようにアプローチしているのか、楠見教育学研究科長に伺いました。

楠見 孝（くすみ たかし）
1982年学習院大学文学部卒業。1987年同大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程退学。1993年博士（心理学）。学習院大学助手、筑波大学講師を経て1994年東京工業大学助教授、1999年京都大学教育学研究科助教授、2007年准教授、2009年教授。2020年より現在、教育学研究科長および教育学部長。

教育学部の沿革

教育学部は、1949（昭和24）年に新制京都大学の発足と同時に設置されました。母体となったのは、京都帝国大学文科大学に設置された教育学教授法講座、文学部の教育学教授法第二講座、教育心理学講座の3講座です。草創期は教育学教授学、教育心理学、教育史、教育方法学で出発し、1953（昭和28）年には、大学院教育学研究科が設置されました。その後、逐次新しい講座が増設され、1976（昭和51）年には学部の課程を3学科編成に改組、1998（平成10）年には3大学科目（系）からなる教育科学科に再編成されました。1980（昭和55）年にわが国最初の心理教育相談室を開設、1983（昭和58）年から学士入学試験を実施しています。

大学院教育学研究科では、1988（昭和63）年に日本初の臨床教育学専攻が設置されました。2004（平成16）年に臨床実践指導者養成コース（博士後期課程）、2018（平成30）年に1専攻5講座となる「教育学環専攻」を設置するなど、実践と研究の密接な連携のもとに先端的な研究・教育を進めています。

年表

1949（昭和24）	教育学部設置
1951（昭和26）	「教育学教授法第二講座」「教育心理学講座」を文学部から教育学部に移管
1953（昭和28）	大学院教育学研究科設置
1980（昭和55）	わが国最初の心理教育相談室を開設
1983（昭和58）	社会人の3年次編入制度を開設
1988（昭和63）	わが国最初の臨床教育学専攻を独立専攻として設置
1997（平成9）	附属臨床教育実践研究センターを設置
2007（平成19）	教育実践コラボレーション・センターを設置
2017（平成29）	グローバル教育展開オフィスを設置
2018（平成30）	大学院を改組し、1専攻5講座となる「教育学環専攻」を設置

――教育学部・教育学研究科の特徴としてどんな点が挙げられますか。

教育学部は京都大学の中で最も少人数の学部ですが、いくつもの特徴があります。

まず挙げられるのは「多様性」です。1学年の定員は60人ながら文系入試、理系入試、特色入試を実施しており、学士入学（3年次編入）の定員を10人も設けています。それゆえ、年齢、能力、キャリアがさまざまで、取り組みたいテーマを明確に持つ学生が集まり、社会人経験のある人たちの存在が周囲に刺激を与えてくれています。未知の領域ではなく誰もが実体験を持つ教育分野だからこそ、学生たちの問題意識が高いという点も特徴と言えましょう。

現在は、学生の男女比はほぼ半々、教員も4割以上が女性です。教員数は38人と学生数に対して多く、きめ細やかな指導体制を実現しており、教育学部祭を開催するなど少人数ならではの親密な雰囲気が教育学部の大きな魅力だと思います。同時に、多様な学びの環境がそろう総合大学の良さと両方のメリットを兼ね備えています。

――「多様性」のほかにどのような特徴がありますか。

「もう一つの大きな特徴として「教員養成に特化した教育学部ではない」ことが挙げられます。人間の発達全体に関わる教育は、学校に限らず家庭や地域社会、職場などあらゆる場面に関係するからです。「心・人間・社会を探究し、未来の教育を創造する」をスローガンに掲げ、人間の中核をなす心とそれを取り巻く社会を追求しながら、トータルな教育に焦点を当てています。

教育学部は「小さな総合学部」と言われるように、哲学、歴史学、心理学、社会学はもちろん、比較教育学、教育行政学、生涯学習論、図書館学、メディア文化論など専攻分野は多岐にわたります。教育学部以外の学部出身の教員が多いのもそうした理由からです。

多様な分野の中で、教育学部の二大柱となるのが教育学と心理学です。貧困や格差、虐待、外国人児童への対応など、時代とともに教育や人間に関わる問題が変化し、多くのストレスを抱える現代社会において、この2分野の重要性は増しています。教育学や心理学において必須の統計学的知識を活かして商品開発やマーケティング職、営業の最前線で活躍する人もいます。また最近では、メンタルヘルスケアの専門家は企業からの需要が多く、卒業生たちは幅広い世界で活躍しています。

その他の特徴として、実習やフィールドワークの充実や、哲学や心理学の強みが挙げられます。後者については、京都帝大文科大学内の教育学講座等を母体とし、学部設置当初、哲学系の先生が担当した背景によるものです。河合隼雄先生、梅本堯夫先生をはじめ日本で初めてとなる心理学分野を立ち上げた先生も多く、そうした方々が教育学部を牽引してきた伝統が息づいています。

（Kyoto University Now by 京都大学基金 第5号 P.17 へつづく）

「薬学」という日本の学問について

「薬づくりに必要なこととは?」
「薬」を総合的に研究する薬学部において、
どんな研究、どんな人材育成を目指しているのか、
加藤薬学研究科長(取材当時)に伺いました。

加藤 博章（かとう ひろあき）
1983年山形大学農学部卒業。1985年山形大学大学院農学研究科修士課程修了。1988年京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。農学博士。京都大学化学研究所、文部省在外研究員、理化学研究所播磨研究所などを経て、2002年より現在、京都大学薬学研究科教授。2020年より2022年3月末まで薬学研究科長および薬学部長。

薬学部の沿革

薬学部は1939(昭和14)年に新設された医学部薬学科を前身として、1960(昭和35)年に設置され、薬学科1学科でスタートしています。2006(平成18)年に薬剤師国家試験受験資格に関する教育制度の変更に伴い、4年制の薬科学科と6年制の薬学科が設置されました。2018(平成30)年度から両学科一括募集をして4年次進級時に学科振り分けを行うこととなり、幅広い教養を身につけたのち、学年進行に伴って専門性を段階的に高めて学修する体系的なカリキュラムが組まれています。

薬学部設置より前の1953(昭和28)年に設置された大学院薬学研究科は、1997(平成9)年の大学院重点化による改組を経て、2012(平成24)年に3専攻を薬科学専攻(博士後期課程)に改組し、薬学専攻(博士課程)を新設しています。

医薬創成情報科学専攻は2022(令和4)年に創発医薬科学専攻として5年一貫制に生まれ変わり、未踏薬学領域を開拓できる創発型薬学博士の育成を目指します。

年表

1939(昭和14)	医学部薬学科新設
1953(昭和28)	大学院薬学研究科設置
1960(昭和35)	薬学部設置
2006(平成18)	薬学部を薬科学科、薬学科に改組
2007(平成19)	薬学研究科医薬創成情報科学専攻設置
2012(平成24)	3専攻を薬科学専攻(博士後期課程)に改組、薬学専攻(博士課程)設置

――薬学部の歴史を語るうえで欠かせないトピックをお聞かせください。

真っ先に挙げたいのは、故・藤多哲朗名誉教授が菌類から免疫抑制作用を示す物質を発見し、その後、製薬企業2社との産学共同研究によって医薬品の開発に至ったことです。指定難病である多発性硬化症の世界初の経口治療薬フィンゴリモドとして開発され、世界中の患者に福音をもたらしました。

薬の元となる物質を大学の研究者が発見してから企業と研究が進められたという流れはもちろん、もともと別の治療薬として開発しようとしたがうまくいかず、企業が提案した別のアプローチによって成功したことなど、この開発ストーリーはまさに産学共同研究の理想の形でした。

その後、藤多先生からのご寄付とご遺志に基づき「藤多仁生奨学金」が創設され、また、フィンゴリモドの作用機序が別の分野の基礎研究を加速させることにつながりました。開発の成功が次世代研究者の育成や、新たなサイエンスへの展開に結びついている点もすばらしい。

何より重要なのは、数々のチャレンジと失敗の中から薬がつくられたことです。本来それが薬づくりの常道であるのに、今の日本では「チャレンジはしなさい。でも失敗は許しません」という風潮が広がっているように思います。

薬づくりのあるべき姿だけでなく、チャレンジ精神を大切にする京都大学の研究大学としてのありようを社会に示すことができた大切なトピックだと思います。

――京都大学薬学部・薬学研究科の特徴としてどのような点がありますか。

本学の特徴を紹介する前に、日本の「薬学」という学問についてのご説明が必要でしょう。薬学は世界中にある学問ではなく、日本固有のものなのです。世界にあるのは薬理学、つまり、薬物が生体に対して示す作用とその作用機序について研究する学問です。イギリスの大学などでは、薬理学は生物学の一ジャンルとなっています。

一方、日本の薬学の始まりは明治時代にさかのぼります。近代薬学の開祖とされる長井長義は留学生としてドイツで医学や化学を習得し、帰国後、日本初の薬化学講座を創設しています。日本の薬学は化合物を扱うケミストリーとしてスタートしたことから、「化学の応用としての薬学」という特徴や強みが形成されていったわけです。

ちなみに、高度かつ総合的な科学技術の集約が必要である新薬をつくることができるのは、世界でわずか7～8カ国です。その中に日本が入っているのは、このような薬学の存在ゆえだと言われています。

京都大学も日本の薬学の特徴を継承し、藤多先生の天然物化学に代表されるように薬化学をはじめ幅広い分野に強みを持ちながら、先端領域を切り拓いてきました。(Kyoto University Now by 京都大学基金 第6号 P.15へつづく)

「人間の学」が目指すところ

「総合人間学部とは何を学ぶところなのか？」人間・文明・自然をめぐる現代的な諸課題に、どんな知をもってアプローチしようとしているのか、小島研究科長（取材当時）に伺いました。

小島 泰雄（こじま やすお）
1985年京都大学文学部卒業。1991年京都大学文学研究科博士後期課程中退。京都大学教養部助手、神戸市外国語大学外国学研究所准教授・教授を経て、2011年より現在、京都大学人間・環境学研究科教授。2020年より2022年3月末まで人間・環境学研究科長および総合人間学部長。

――総合人間学部と人間・環境学研究科の設立の経緯をお聞かせください。

総合人間学部（以下、総人）と人間・環境学研究科（以下、人環）はともに教養部を母体として設立されました。教養部は全学部の1～2年生の一般教育を担ってきましたが、1990年前後の大綱化と呼ばれる大学改革において、教養部の解体が全国で進みました。その中で、京都大学は教養部を引き継ぐ形で総人を設置しています。教養・共通教育の実施責任部局であると同時に、自らの理念で学生の養成を行う部局という独自のモデルがつくられたのです。

一方、人環は総人設置の1年前に、同じく教養部改革と大学院改革構想の一環として、京都大学初の単一専攻の独立研究科として設置されました。人環には総人の多くの教員が併任され、大学院教育に携わってきたことから、2003年に一体化するに至りました。

設立の経緯はこのとおりですが、伝統という観点からすると、教養部の前身である第三高等学校の歴史をも継承していると言えるでしょう。京都大学の「自由と自主」の学風は三高が一つの源とされており、両部局はその記憶を根底に持っているのだと思います。

――総人と人環のオリジナリティはどんな点でしょうか。

大学改革の一環とはいえ、当然ながら社会が求める状況に応じて部局はつくられます。総人は「新たな人間の学」の探究を、人環は「人間と環境のより良い関係」の考究を通して社会課題を解決することをミッションとして誕生しました。

設置後の30年間で世界は驚異的なスピードで変化しました。当時、グローバル化という概念はまだ使われ始めた頃でしたし、パソコンやインターネットは普及段階だったものが、現在は四六時中、情報にさらされるようになっています。「懸念」と表現されていた気候変動をはじめとする環境問題は、すでに「危機」となっています。問題化していた少子高齢化は人口減少へと実質化し、そして今またコロナ禍に向き合っています。

当時はまだ萌芽であった社会変化における問題群に対して、新たな学問的融合や人物育成を通して応えようとした先見性こそ、オリジナリティであると考えています。

そしてもう一つ、重要なオリジナリティが「多様性」です。設置の背景に加え、さまざまな専門領域の研究者によって教養・共通教育が担われてきたという歴史も関係しています。そのため総人は学際融合を本旨としてきました。学際融合は方法の軸をなすものであり、多様な学問の体系を並列させて提示することで、学生たちは各領域を関係づけ、独自の領域や体系を形づくっていくのです。

「総人は何をする学部なのか」といまだに聞かれることが多いのですが、この問い自体が総人のアイデンティティを表していると思います。

（Kyoto University Now by 京都大学基金 第6号 P.17へつづく）

総合人間学部／人間・環境学研究科の沿革

教養部改革および大学院改革構想の一環として、人間・環境学研究科は1991（平成3）年に、総合人間学部は1992（平成4）年に設立されました。

人間・環境学研究科は京都大学において初めて、学部を持たない独立研究科として設立され、総合人間学部の多くの教員が併任してきました。両部局は設立以来、10年にわたって築いた連携と協力関係を踏まえて2003（平成15）年に一体化し、人間・環境学研究科は総合人間学部に基礎を置く大学院となりました。

その後、2013年に設置された国際高等教育院が教養・共通教育の企画運営を担当することとなり、総合人間学部と人間・環境学研究科は独自の教育研究と全学の教養・共通教育の主力を担う部局としてミッションが明確化されています。

一体化に伴って人間・環境学研究科は専攻を再編、総合人間学部は5学系を設置。両部局の教育理念をより内実のある形で実現することを目指し、新領域を切り拓く統合知を究明しています。

年表

1991（平成3）	京都大学最初の独立研究科として人間・環境学研究科創設
1992（平成4）	総合人間学部設置
2003（平成15）	人間・環境学研究科の3専攻を改編、新たに共生人間学専攻、共生文明学専攻、相関環境学専攻を設置
	総合人間学部の4学科を廃止し1学科に改組、5学系を設置
	両部局を一体化し、人間・環境学研究科へ教員組織を統合
2008（平成20）	人間・環境学研究科に学際教育研究部を設置
2018（平成30）	総合人間学部／人間・環境学研究科設立25周年記念事業を開催